

韓門難易兩派の散文（上）

— 訳注・陳柱『中国散文史』 —

谷 口 匡

本稿は陳柱『中国散文史』の第四編「古文極盛時代の散文」のうち、第三節「韓門難易兩派の散文」（韓門難易兩派之散文：附孫樵）を和訳し、簡単な注を施したものである。ここに「韓門難易兩派」というのは、唐の散文家・韓愈の二人の門弟である皇甫湜こうほしよくと李翱りこうを指す。前者は難解、後者は平易、それぞれ韓愈の散文を受け継ぎながら特色を異にしていることから著者はこのように称しているが、本文では李翱、皇甫湜の順で記述がなされる。

陳柱ちんちゆう（1889～1944）は中国の民国期を生きた古典学者、教育者。『中国散文史』は上古から清末に到る中国歴代の散文とそれに対する批評を豊富に引用して、その変遷をまとめた書物であり、1937年5月に上海商務印書館から出版された。本訳注は1963年4月の商務印書館香港分館重印版を底本にし、この「上」では李翱と皇甫湜を扱った部分を訳出した。紙幅の関係上、孫樵そんしょうに言及する付録部分は「下」に譲る。なお翻訳にあたっては、諸本によって文字を改め、適宜固有名詞などを補い、段落を分けた部分がある。

（韓門難易兩派の散文）

前節で韓愈の文には二派があると述べた⁽¹⁾。その一つは語句が適切に用いられていてわかりやすいもので、また一つは見慣れない変った表現を好むものである。前者は言葉が比較的平易であり、後者の言葉は難解を尊ぶ。韓門の李翱はまさしく前の一派であり、皇甫湜は後の一派に属しているといえる。

『新唐書』李翱伝にはいう、⁽²⁾「李翱は字を習之あざな しゅうしといい、最初、韓愈について文章を学んで、ことばは大きく深みがあり、当時の人々から評判を得ていた」。四部叢刊影印明刊本の『李文公集』十八巻がある。

『新唐書』皇甫湜⁽³⁾伝にはいう、「皇甫湜は字を持正^{じせい}という。裴度^{はいど}の属官にとりたてられた。裴度が福光寺を建てた時、碑を立てようとして、白居易に撰文を求めた。皇甫湜は『近くにいる私を見捨ててわざわざ遠くの白居易を取るなら、辞職させていただきたい』と怒った。裴度が詫びると、湜は一斗の酒を求め、存分に飲んで、筆をとるやたちどころに文章を作り上げた。裴度は車馬や美しい彩りの絹などで手厚くお礼をしたが、湜は大いに怒って『私は「顧況^{こきょう}集の序」を書いて以後、人にひけをとると思ったことはない。今、碑の文字数は三千で、一字につき絹三匹もraitたい。どうして私への待遇がこんなに低いのか』と言った。裴度は『非凡な才能だ』と笑い、その後、言われたとおりに彼に報酬を与えた」。四部叢刊影印宋刊本の『皇甫持正文集』六卷がある。

李翱は文章を論じていう、「内容が深ければ思いは高遠で、思いが高遠であれば筋道がはっきりし、筋道がはっきりすれば氣勢はまっすぐで、⁽⁶⁾氣勢がまっすぐであれば言葉は満ちあふれる」、またいう、「昔の人は精巧に表現することができただけである。その言葉が的確か否か、やさしいか難しいかがわかっていない」(以上「朱載言に与うる書」⁽⁷⁾)。

皇甫湜は文章については次のようにいう、「思いが新しければ通常と異なる。通常と異なれば見慣れない。言葉の調子が高ければ衆人に抜きんでる。衆人に抜きんでれば清新である。虎や豹の紋様は犬や羊よりも光り輝やかざるを得ない。鸞鳳(神鳥の名)の鳴き声はカササギよりも美しく響かずにはいられない。黄金や美玉の光は素焼きの土器や石よりもまぶしく光らないことはない。ことさらに先を行こうとするのではなく、⁽⁸⁾おのずからそうなのである。必ず険しい岩石を戴いてはじめて高大な山となり、水が天までみなぎってはじめて海となる。明堂の棟(屋根の一番高い部分)は必ず雲と虹が巻きつき、黒い竜のあごの下玉はきつと深い淵にしっかり守られている」(「李生に答うる第一の書」⁽⁹⁾)。ここに二氏の主張を見ることができる。

もと
故の正議大夫・行尚書・吏部侍郎・上柱国・賜紫金魚袋・贈礼部尚書⁽¹⁰⁾の韓公の行状
李翱

公は諱を愈、字を退之^{たいし}といい、昌黎^{しょうれい}の某の出身である。生まれて三歳

で父が没し、兄の韓会^{かんかい}の家で育てられた。成長して学問をするようになると、他の学生が学習している内容を記憶することができた。二十五歳で科挙の進士科に及第した。汴州^{べんしゅう}で反乱がおこり、朝廷はもとの宰相で東都留守^{りゅうしゅ}である董晋^{とうしん}を平章事・宣武軍節度使に任じ、汴州を平定させた。董晋は公を召し出して向かい、そのまま汴州に入り、公は試秘書省校書郎の職を得、觀察推官となった。董晋が死ぬと、公は葬送に随行して汴州を出た。その四日後、汴州で反乱がおこり、職務に従事して残っていた者はみな殺された。武寧軍節度使張建封^{ちやうけんぽう}の請願によって節度推官となり、試太常寺協律郎となった。銓選^{せんせん}（任用試験）を経て四門博士の職を授けられ、觀察御史に転じた。寵臣に憎まれたため、都を追われて連州陽山^{れんしゅう}の県令になった。人民に恩恵を施す善政を行い、公が去ると人々の多くはわが子に「韓」と名づけたという。

江寧府法曹參軍^{かうねい}への転任を経て、都に戻り、権知国子博士となった。宰相に公の文章を愛する人がおり、学術に関わる職によって公を処遇しようとしたところ、その職につこうと争う者がいて、公のデマをでっちあげて非難した。公は災難が及ぶのを恐れ、かくて洛陽^{らくよう}での勤務を求め、そこで権知国子博士となり、三年で真の国子博士に改められた。刑部に配置換えとなって、洛陽勤務の都官員外郎となり、河南^{かなん}の県令に転じ、日々その務めに精励して東都留守や河南府尹^{いん}と論争したため、軍人は禁制を犯そうとする者が誰もいなかった。

長安に戻って職方員外郎になった。華州刺史が華陰^{かしゅう}の県令柳澗^{か いん りゅうかん}の罪を弾劾し、左遷しようとした。公は上疏して、どうか觀察御史を遣わして善惡を弁じた上で、罪によって処罰してほしい、そうすれば下僚が不当な目にあわないと要請したが、すでに柳澗には違法行為があり、公はこのことから再び国子博士となった。比部郎中に転任し、史館修撰を兼務した。考功郎中に転じたのちも、そのまま史館修撰を兼任した。

数か月後、考功郎中のまま知制誥^{さいしごう}となった。天子は蔡州を平定しようとしてまず御史中丞の裴度に命じて諸軍ごとに兵の状況を視察させたところ、帰還するや兵は出陣可能で、賊は滅ぼせる状態だと報告したが、いささか宰相の意向とは相違があった。数か月経って刺客が宰相（武元衡^{ぶげん}）を殺し、さらに御史中丞（裴度）を殺害しようしとして失敗し、裴

度は軽い傷を負ったのみで、馬が走り出したおかげで免れ、ついに宰相となつて、東方の軍を統率した。安祿山^{あんろくざん}が范陽^{はんよう}からおこり、二つの都を陥落させて以来、黄河の南北の七節度使は、自身が死ぬと息子を立てて、軍士表を作つて請願し、朝廷はそれをもとに地位を与えていた。貞元^{ていげん}の末年になると、中央から派遣された節度使であつても死亡すると、多くはその軍内部で人選して節度使の副官を後任として節旄^{せつぼう}を授け、これが慣例となつて常態化していた。朝廷⁽¹¹⁾の諸賢は事無きを喜び、しばしいくさをしないのをよしとして、その議論は多く宰相の裴度と異なっていたが、ただ公だけは刺客が宰相を殺した一事をもつていくさを止めるのは、甚だ臆病であり、いくさは止めるべきではなく、天下全体の力で淮西^{わいせい}の三州を取るのはたやすいことであると考え、裴度と意見が一致していた。よつて結局いくさは行われたが、宰相の中にはこれを喜ばない者もいた。任期の月数が終つて、中書舍人に異動し、緋の衣と魚袋を賜わり、その後ついにある事から太子右庶子^{たいしゆうしよし}に異動を命じられた。

元和十二年秋、兵が疲れ弱り長く駐屯して、賊がまだ滅びないため、天子は宰相裴度に淮西節度使となつて宣撫・征伐するように命じ、宰相は公にも同行を要請した。そこで公は御史中丞の兼務を命ぜられ、三品の衣と魚袋を賜わり、行軍司馬となつて、宰相に従つて鄆城^{えんじやう}にいた。公は蔡州のよりすぐりの兵士がことごとく境界まで集まつて、官軍に抵抗して、城を守備する者はおおむね老人か年少者で、しかも千人に満たないことを知り、しばしば宰相に言上して、兵三千人がぬけ道を通つて入り、必ずや呉元済^{こげんせい}（賊將）を捕えたいと願い出た。宰相がまだ出陣しないうちに、李愬^{りそ}が唐州の文城^{ぶんじやう}から、その兵卒を携えて夜蔡州に入⁽¹²⁾り、ついに元済を捕えた。蔡州が平定されると、平民の柏耆⁽¹³⁾が計略を持つて公に謁見した。公はともに話して驚き、かくて宰相に「淮西が滅んで、王承宗⁽¹⁴⁾は肝を冷やしています。民衆の兵を用いるまでもなく、能弁の者に閣下の書簡を持たせ、禍福を明らかにして招撫すれば、彼は必ず帰順します」と申し上げ、宰相は納得した。公は柏耆に口移しで宰相の書簡を作らせ、禍福を明らかにして、柏耆に袖の中に携えて鎮州^{ちんしやう}に到らせた。王承宗は果たして大いに恐れ、文書を奉つて徳・棣^{とく・れい}の二州を割讓することを願い出た。宰相は都に戻り、公は刑部侍郎に昇任した。

一年あまりして、仏骨が鳳翔^{ほうしょう}から到着して、都の諸寺を順々に回った。その時、指や頭⁽¹⁵⁾のてっぺんを焼いて福を祈る人々がいた。公は文書を奉って次のように言った、「伏羲^{ふっき}から周の文王・武王の時に到るまで、ずっと中国には仏教がありませんでしたが、寿命は多い時で百歳に達し、中には百歳を超える者もありました。仏法が中国に入ってから以後、帝王が仏を信仰すると寿命が長くなることはかなわず、梁の武帝は最も謹しみ深く信仰しましたが、かえって国は大きく乱れました。どうか仏骨を焼き棄てていただきたい」と。文書が奏上^{ちようしやう}されると、潮州の刺史に左遷され、袁州の刺史に転任した。ここでは男女の子を奴隷として売った人民に対して、公はすべて売り値を計算してその分を補償し、買い主からとり戻して帰した。

都に戻って国子祭酒へ転任した。国子学の助手に礼には詳しいがみずばらしい身なりの者がいた。教官には豪族の子が多く、彼をのけ者にして一緒に食事ができなかった。公は事務官に命じて、助手を呼んで国子祭酒（学長）と食事するように言いつけた。教官たちは以後助手をさげすまないようになった。儒学を修める者を推薦して教官にし、日々⁽¹⁷⁾学生を集めてそこで講義させた。学生は多数がわれ先に聴講に赴き、みな喜んで、「韓公が祭酒になってから、国子監は寂しくなくなった」と言った。

兵部侍郎に転任した。鎮州の反乱の時、（部下の王廷湊が）節度使^{でん}の田弘正^{こうせい}⁽¹⁸⁾を殺し、これを討伐しようとして失敗し、そのまま王廷湊を節度使とした。公には現地に行って宣撫するよう詔が出された。出発後、人々はみな心配し、元稹は韓愈ほどの人を失うのは残念であると奏上した。穆宗も後悔し、詔を出して境界まで見に行かせ、必ずしも敵地に乗り込まなくてよいと伝えた。公は言った、「どうして君命を受けながらぐずぐずと身の安全を考えていられようか」。かくて車馬を疾走させて敵地⁽¹⁹⁾に入った。王廷湊は軍を配備し、刀を抜き、弓矢を引いて迎えた。公館に到着すると、武装した兵士が前庭に整列している。公と廷湊、監軍使の三人が位置につき、着席すると、廷湊は言った、「ごたごたしたのはこの兵士たちのしわざで、もとより私の本意ではない」。公は大声で「天子は将軍が節度使の人材であると見込まれたからこそ、旗旄を授けられたのだ。将軍が兵士たちと語りあわれたかどうかは知らないが、大きな見込

み違いをしている⁽²⁰⁾」と叫んだ。武装兵は進み出ると憤って「先の太史(王武俊)は国のために朱滔を討ち、滔は敗走して、当時の血染めの衣服はすべて残っている。この軍がどうして朝廷に背き、賊と見なされるのか」と言った。公は告げて言った、「兵士諸君、しばらく静粛にして、私の話を聴いてほしい。私は諸君がもはや先の太史の戦功と忠義を記憶していないのではと考えている。もし今なお憶えていれば大いによろしい。加えて、逆らうことと従うことの利害については、今さら古い史実を引くことはできない。ただ天宝以来の禍福については、諸君のために明らかにしよう。安祿山・史思明・李希烈・梁崇義・朱滔・朱泚・呉元済・李師道^{しどう}には、子とか孫とかが残っているか。また官職に就いている者がいるか」。兵士たちはみな「いない」と言った。また言う、「田閣下(田弘正)は、魏州・博州など六州を献じて唐王朝に帰順して、節度使となり、後には中書令まで昇りつめ、父・子ともに旗旄を受け、子と孫はまだ幼い者でもりっぱな官を得て、富貴をきわめ、天下の中でも特別に天子から目をかけられている。劉悟・李祐^{りゆうご}はいずれも節度使となった。王承元^{おうしょうげん}も十七歳になったばかりで、旌節を授けられた。これらはみな軍中で聞くとくところであろう」。兵士たちはそこで言う、「田弘正はこの軍をいためつけた。よって軍中が落ち着かないのだ」。公は言った、「そうだ、だがお前たち軍隊も田閣下その人を殺し、その家族を滅ぼしたのだ。そのうえ何がいえるか」。兵士たちは恐縮して「兵部侍郎(韓愈)の言うことはもっともだ」と繰り返した。王廷湊は兵士たちの心が動くのを恐れ、慌しく彼らに合図して解散させ、そこで泣いて公に向って「兵部侍郎が来たのは、私にどうすることを望んでいるのか」と言った。公は言った、「宮中や天子の軍隊の将軍には、牛元翼^{ぎゅうげんよく}クラスの者は少なくないが、ただ朝廷は道理に鑑みてこれを捨て置くことはできない。それでも将軍が長らくこれを包囲しているのはなぜか」。王廷湊は「ただちに囲みを解いて出そう」と言った。公は「もし本当なら、丸くおさまるだろう」と言い、そこでもとに酒盛りをして帰った。牛元翼は約束どおり囲みから出た。公は帰還すると、天子の御前で王廷湊や兵士たちとの問答をことごとく報告した。天子は大いに喜んで「そなたはひるむことなく彼に向ってそのように言ったのか」と言い、このことで公を拔擢する意向を固めた。王武俊

は太師の称号を贈られており、「太史」と呼ぶのは燕・趙の方言である。

吏部侍郎⁽²⁴⁾に転任した。官吏たちはみな鍵をかけず、部外者の出入りを許すようになった。ある人が公にその理由を問うと、公は言った、「人が鬼神を恐れるのは、目に見えないからだ。鬼神がもし見えたら、人は恐れないだろう。官員の候補者は官吏を見ることができないため、官吏の勢力が幅をきかせているが、部外者の出入りを許せばその勢力は抑えられるだろう」。

京兆の尹に転任となり、御史大夫を兼務した。特別に詔が出され、御史台へ挨拶に行かなくてもよく、かつ今回のみの特例であった。天子の軍隊の将校や兵士は鳴りをひそめ、「もし仏骨を焼こうとした人なら、どうして逆らえよう」とひそかに噂しあった。こうして盗賊は出なくなった。ひでりになっても、米の価格は決して上げようとしなかった。李紳が御史中丞になると、囚人^{かせ}に枷をはめて京兆府に押送し、京兆の尹の杖で叩かせようとした。公は「このようなことがあってよいものか」と言い、囚人を解放して帰した。この時、李紳は天子のおぼえがめでたく、宰相^{りほうきつ}（李逢吉）は彼を追放しようとして、御史台と京兆府が不和であることを理由に請願を行い、李紳を都から出して江西觀察使に、公を兵部侍郎にしようとした。李紳がまた都の官にとどまれるようになると、公は転任の挨拶に参内した。天子は「そなたが李紳と争っているのはどのようなわけか」と問うた。公はそこで事情を弁じ、数日後、再び吏部侍郎となった。長慶四年に病気にかかり、百日に及ぶ休暇をとって、辞職したあとの、十二月二日に靖安里^{せいあん}の家で没した。

公は人情に厚く細かなことに拘らない性格で、議論は多くが的を得ており、人と交わると、ずっとその交情を保ち続けた。親族や遠戚、知人の娘で夫のいない者十人を嫁がせた。幼くして兄嫁の鄭氏^{てい}に育てられ、兄嫁が亡くなると、一か年の喪に服してその恩に報いた。文章を深く究め、揚雄以後すぐれた作者が出ていないといつも思っており、作った文章は前人の言を真似することなく、はじめからそれに匹敵していた。貞元^{ていげん}の末から現在に至るまで、後進の人々で、古文を書こうとする者は誰もが公の文章を見て規範とした。文集四十卷、外集十卷がある。病気になると、そのまま退職を願い出て辞職した。いつも友人と話す際は、その最後に

妻子の面倒を宜しくと頼んだ。また言う、「長兄には徳があり、薬の処方
に詳しく、食事にはきつと薬物書を参照していたが、四十二歳までしか
生きられなかった。私は物事にうとく、食事にも避けるところがないが、
吏部侍郎の地位にまでなり、長兄より十五年長生きしている。もしこれ
でなご不足なら、何において満足できよう。しかも寿命をもって家で臨
終を迎えられ、幸いにも大義を失することなく、冥土で祖先にお目にか
かれるのは、光栄である」と。享年五十七、死後、礼部尚書の官を贈ら
れた。以上のように謹んで任官の事跡^{おくりな}を揃えて報告します。どうか考功
に通牒し、太常に文書を下して謚^{おくりな}を定め、あわせて史館に通牒してい
だきたく存じます。謹んで報告申し上げます。

上記のうち王廷湊を記述した一段は、思うに白話文に近い。皇甫湜の
方はこれと逆である。繆荃孫^{ぼくせんぞん}はいう、「湜は、韓門弟子^{ていし}であり、句は奇怪、
語は重厚で、師・韓愈の方法から離れず、巧みに飾られ陰しく難解であ
つて、互いに食い違つて意味がよく通じないが、同時代の文人と比較すると、
もとより彼らの上に出ている⁽²⁵⁾」。

韓文公墓銘⁽²⁶⁾

皇甫湜

長慶四年八月、昌黎の韓先生はすでに病によって吏部侍郎の任を免ぜ
られた。手紙で私に「死後にわが身を世の移り変わりとともに摩滅させ
ないようにできるのはあなただけだ」と諭し告げて、墓誌銘の文を委嘱
した。その年の十二月丙子の日についに亡くなった。翌年正月、残され
た子の昶^{ちやう}は功績の記録を使者にささげ持たせ、死の通知⁽²⁷⁾を伝えて来させ
た。三月癸酉の日、河南河陽の地に埋葬し、かくて哭してその墓に銘文
を書く。その詳細は神道碑に掲げることとする。

先生は諱を韓愈、字を退之という。後魏^{こうぎ}の安桓王韓茂^{あんかん かん も}の六代の孫である。
祖父は朝散大夫桂州長史^{けいしゅう}で諱を叡素^{えいそ}という。父は秘書郎贈尚書左僕射^{ぼくや}
で諱を仲卿^{ちゅうけい}といった。先生は七歳で学問を好み、言葉が口からでるとそれ
がそのまま文章になった。成年になると思う存分文章を著わして聖人の
道を伝えた。人々は最初は信じなかったが、文章が発せられると覆いと
どめようがなく、評判はとどろき、学識が光り輝いた。衆人はそこで漸

く驚愕して、こぞって排斥した。先生は危機に直面して挫折しそうになりながら、怠らずにますます盛んにやり、最後は大いに天下に信頼を勝ち取った。

先生の創作は一定の型にとらわれず、みな至って妥当で精巧をきわめていた。経典の精髓をえぐり出し、聖賢のはかりごとを把握し、上古に遡って聖人を友とし、邪悪を踏みつけ、異端を押しつけて、孔子の教えを助け、広大中正の道を保った。真意を理解するか罰するかは自身のはかり知るところではなく、古えを味わい今に身を浸して、学問には限りがなく、広々と深くして、窺い知ることができない。その筆鋒がのびやかな時になると、豪放・隱微な心情や痛快な文章が、紙背までとおる筆力で異彩を放ち、鯨の形をした撞木で鐘を鳴らすかのようにであり、また春の麗らかな風景のようでもあり、天下の人々を刮目させる。だがその内容は堅実緻密で奥深く、一章一句が適切であり、高度な緻密さは神業で天賦のもののようなのだ。ああ、よくぞここまできたものだ。後人はそれに何もつけ加えられない。周代以来、これほどの人は先生一人だけである。

最初、先生は進士に合格して三十一歳⁽³¹⁾で任官し、種々の官を歴任したが、觀察御史・尚書職方員外郎・中書舍人の時、前後三回左遷され、それらはいずれも上書や陳述をして事件を処理しようとし、朝廷の意向が異なったことで罪を得たのである。仏教と道教を恨み、聖人の道の堤防が決壊するや、先導してまた築いた。刑部侍郎となると、憲宗が仏骨を宮中に迎え入れたのはよくないことだ、そうさせた私自身の恥でもあると明言し、天子を激怒させた。この時先生は泰然と落ち着いていて、都から八千里離れた海のほとりに流された。ああ、これこそ古人のいう、かりそめに頭で知るのではなく、本当に踏み行なう者なのだ。

呉元済が反乱を起こすと官軍は長く駐屯して戦功がなく、国庫は枯渇して将兵は疑い深くなり、民衆は恐れてざわめいた。先生は太子右庶子のまま御史中丞・行軍司馬を兼ね、宰相(裴度)の軍が潼関^{とうかん}を出ると、自ら願い出て先に駟伝の馬車に乗って汴州に到り、淮西行營都統(韓弘^{かんこう})を説得して、軍隊と兵車が力を合わせ、ついに呉元済を捕えた。

王廷湊が背いて、牛元翼^{しんしゅう}を深州に包囲した時、救援の兵十萬は、遠くから見ただけで前進しようとしなかった。朝廷の臣下を選んで宣撫に派

遣する旨の詔が出され、衆人が尻込みしていると、先生は勇んで出かけた。
元稹⁽³²⁾は天子に「韓愈を失うのは惜しい」と言い、穆宗も悔やみ、「すぐに
は敵地に入らぬように」との詔を急いで出した。先生は「ひき止めるの
は大君の慈しみ、命を投げ出すのは臣下の正義」と言い、そのまま賊の
陣営に至って、人々に呼びかけて罪をただと、賊はおのき恥じ入っ
て地にひれ伏し、こうしてやっと牛元翼を囲いから出した。『春秋』で
臧孫辰⁽³³⁾が穀物の買い入れを斉に申し入れたことを褒めているのは、困難
を急いで救うということであり、これと先生が王廷湊を宣撫したことで
で難しさを比べると、どちらを褒めるべきであろうか。ああ、先生はま
ことに古えにいう大臣⁽³⁴⁾ではなかろうか。

帰還して京兆の尹となると、近衛兵の動きを鎮め、日照りの際に買
つける穀物の価格を落着かせ⁽³⁵⁾、天子お気に入りの臣の切っ先をくじ
いて、再び吏部侍郎となつて亡くなつた。享年五十七。礼部尚書の官を贈
られた。

先生は人と交わって明るく朗らかで、偉ぶったところがなかった。親
族や旧友で独り立ちできない者がいると、きっと自分を頼らせて衣服を
与え、冠婚葬祭の世話を焼いた。日ごろは寢食にも常に書物を伴い、疲
れるとそれを枕にし、食事にもそれが味つけになった。六経の講義を怠
ることなく、学生の教育に励んだ。いつも完璧であろうとし、交遊には
笑いや吟詠唱歌を交え、誰もがその徳義⁽³⁸⁾に惹かれて帰るのを忘れた。ああ、
なんと楽しく安らかな君子であり、有徳の巨人であることか。

夫人の高平郡君⁽³⁹⁾は、范陽郡⁽⁴⁰⁾の盧氏の娘であり、子は前進士⁽⁴¹⁾の昶、娘婿
は左拾遺⁽⁴²⁾の李漢と集賢校理⁽⁴³⁾の樊宗懿⁽⁴⁴⁾であり、次女は陳氏に嫁ぐ予定で、
三女はまだ成人していない。銘にいう、

天には道があり、それはわが先生にある。万人がみな首をのばして仰ぎ、
廟堂⁽⁴⁵⁾に座して天道を行ってほしいと望んでいた。令名高き人はこの世を
去り、天下の人々を悲しませた。聖人には文があるが、それは千年の間
に道に背いて衰微した。先生はそれを復興し、空前の輝きを与え、大い
なる仁と義を発揚して、その光は天に満ちている。先生ほどの人は、長
寿であってしかるべきだ。思うにわが先生の文章は、世を治める規律で
あり大きな輪だ。口をつぐんでその時代に行われなくても、後代の子孫

に隆盛をもたらずだろう。ああ、永久の別れに当って、この悲しみははかりしれない。

『石遺室論文』⁽⁴¹⁾にはいう、「李翱の文は純粹誠実であり、奇を誇ったりしないが、読むとしばしば心を動かされ、おのずと平板ではない。皇甫湜の文は新たに言葉を造って錬り鍛え、時に文章が晦渋で、倒置を常用するが、この碑誌はそれでもなおごつごつとして読みにくいところがない。李翱は王廷湊の一節において、叙述が一番詳しく、最も力を注いでいる。韓愈の生涯の伝えるべき事柄でこれ以上のものはない。「仏骨を諫むる表」⁽⁴²⁾の一節はそれに次ぐものであろう。『新唐書』韓愈伝は李翱の文を用いて、韓愈は千古不滅となった。その一段の文章をどう書いているかを論ずるなら、一見あっさりしているようで、実は力が注がれていないことはなく、言葉は簡潔だが意味は重々しい。当時、なぜ二つの碑誌⁽⁴³⁾をどちらも皇甫湜に委嘱したのだろうか。おそらく韓愈は平素から司馬相如^{しょうじょ}と揚雄^{ようゆう}を好み、皇甫湜の晦渋な文章なら彼らの文章に似せることができると思ったから、いずれも皇甫湜に執筆させたものであろうか。皇甫湜は『墓誌銘』において力を注いで韓愈の文を論じ、『經典の精髓をえぐり出し、聖賢のはかりごとを把握し、広々と深くして、窺い知ることはできず、高度な精密さは、神業の域にあり天賦のもののような』と言っているが、これらはみな褒めすぎの気味があり、韓愈の場合そこまではいえない。そのほか王廷湊に宣撫したことを記した箇所では、すべて大声を張り上げて罪を責め立て、賊衆が恐れひれ伏したと書いているが、それはどうも実情ではないようだ。もし書かれているとおりなら、韓愈は顔真卿^{がんしんけい}や孔巢父⁽⁴⁴⁾の後継ぎということにならざるをえない。だから『新唐書』韓愈伝はこれをとらなかったのである」。

高澍然^{こうしゅぜん}⁽⁴⁶⁾はいう、「韓愈の文は博大で平易である。私は『韓愈故』⁽⁴⁷⁾においてこれを詳しく述べた。そして李翱は博大さにおいてはやや劣るが、平易さにおいてはまさっているようだ。思うに韓愈は『孟子』に淵源を求め、そのすべてを集めているから、博大と平易が並立する。李翱は『論語』に淵源を求め、その一つの極限を獲得しているから、博大さは及ばないものの、平易さは韓愈にないものがある。これを天地の気に喩えると、

音もなく虚ろであり、淡泊穏やかで光り輝くものが、『論語』の平易さである。清く澄んで汚れず、誉れ高く平らで広々としているのが、『孟子』の平易さである。二者は見分けがつかない。だがこれを学んだ者はちがいを感^{おおよけ}じないことがあるうか。よって私にとっては韓愈は公での好み、李翱は私的な好みとなっているようだ。書物を繙くたびに異なる味覚を感じて、必ず満ち足りるまで味わおうとし、またその味に二度と出会えぬのを恐れて、急いで味わいつくそうとせず、残しておいて再び味わおうとする。その愛惜のほどはこのようだが、自分でそれに気づかないのだ」。

高氏の論は正しい。私はかつて次のように論じたことがある。⁽⁴⁸⁾韓愈の議論文は『孟子』から出ていて、李翱の議論文は『論語』に基づいている。『孟子』から出ているがゆえに、広大な気が次々と移りめぐり、その格調はすぐれていて独特である。『論語』に基づくため、その味わいは上品であっさりしていて、趣きは穏やかである。韓愈の文のよさはわかりやすい。顔真卿の書がわかりやすいのと同じである。李翱の文のよさはわかりにくい。王羲之と王献之の字がわかりにくいと同じである。皇甫湜の場合は韓愈の独特さに学びながらその域に達しておらず、ここでともに論ずるほどではない。

(本学教授)

注

- (1) 第二節「古文大家韓柳之散文」では実用の文も含めて三類に分けられると述べる。
- (2) 『新唐書』巻177。
- (3) 『新唐書』巻176。
- (4) 底本「将立碑文」。『新唐書』には「文」の字がない。
- (5) 底本「碑文三千字」。『新唐書』により「碑字三千字」に改める。
- (6) 底本「意遠則辞弁、辞弁則氣直」。『新唐書』により「辞」を「理」に改める。
- (7) 四部叢刊本『李文公集』巻6。
- (8) 底本「非有意光之也」。『皇甫持正文集』により「光」を「先」に改める。
- (9) 四部叢刊本『皇甫持正文集』巻4。
- (10) 『李文公集』巻11、『文苑英華』巻976、『全唐文』巻639。
- (11) 底本「期廷」。諸本により「朝廷」に改める。
- (12) 正しくは豫州か。
- (13) 『新唐書』李愬伝では「文城柵」とする。

- (14) 底本「提其卒牽夜入蔡州」。諸本により「牽」を「以」に改める。
- (15) 『旧唐書』韓愈伝では「臂^{うで}」とする。
- (16) 韓愈「仏骨を論ずる表」では伏羲の名は見えず、黄帝から始まる。
- (17) 底本「曰」。諸本により「日」に改める。
- (18) 底本「田弘正」。『李文公集』『文苑英華』により「田弘正」に改める。以下同様。
- (19) 底本「遂」。諸本により「逆」に改める。
- (20) 底本「未得乃大錯」。『李文公集』により「未及大錯」に改め、「及大錯」で一句として解する。
- (21) 底本「大乃好」。諸本により「乃大好」に改める。
- (22) 底本「李佑」。『文苑英華』『全唐文』により改める。
- (23) 底本「牛元翼」。諸本により改める。
- (24) 底本「史部侍郎」。諸本により改める。
- (25) 「皇甫持正文集校記」に見える。
- (26) 『皇甫持正文集』巻6、『唐文粹』巻69、『全唐文』巻687。底本「韓文公墓誌銘」。『皇甫持正文集』により改める。
- (27) 底本「計」。『皇甫持正文集』『全唐文』により「計」に改める。
- (28) 底本「跋」。『全唐文』により「跋」に改める。
- (29) 底本「知輿罪」。『皇甫持正文集』『全唐文』により「知与罪」に改める。
- (30) 底本「酬放」。『唐文粹』『全唐文』により「酣放」に改める。
- (31) 二十九歳の誤り。
- (32) 『左伝』莊公二十八年。
- (33) 『国語』魯語上に見える言葉。
- (34) 『論語』先進の「所謂大臣とは道を以て君に事^{つか}え、不可なれば則ち止む」を踏まえる。
- (35) 底本の句読点を改め、「帖旱羅」で一句とする。
- (36) 底本「倖臣」。諸本により「倖」に改める。李紳を指す。
- (37) 京兆の尹の前に一度吏部侍郎になった。
- (38) 底本「忘婦」。諸本により「忘婦」に改める。
- (39) 底本「高平君」。『唐文粹』『全唐文』によって「郡」を補う。
- (40) 底本「生廟」。『唐文粹』『全唐文』によって「坐廟」に改める。
- (41) 陳衍『石遺室論文』巻四・唐に見える。
- (42) 「仏骨を論ずる表」を指す。
- (43) 「韓文公墓銘」と「韓文公神道碑」。
- (44) 節度使の李希烈が背いた時、徳宗の命で唐朝に帰順するよう説得に当たった。
- (45) 徳宗時代、魏博節度使となり、田悦が背いた際に君臣の道を説いて賊衆を説得した。
- (46) 引用部分は「李習之先生文読序」（『柳快軒文集』巻上）に見える。
- (47) 「韓文故序」（『柳快軒文集』巻上）のこと。
- (48) 『孟子』の文が韓愈に繋がっていくことは、『中国散文史』第一編第四章第四節「儒家孟荀之散文」に言及がある。

主要参考文献

- ・高澍然『柳快軒文集』（近代中国史料叢刊第89輯、文海出版社、1973年）

- ・前野直彬『韓愈の生涯』（秋山書店、1976 年）
- ・長沢規矩也編『和刻本漢籍文集 第二輯』（汲古書院、1977 年）
- ・高步瀛選注『唐宋文學要』（上海古籍出版社、1982 年）
- ・吳文治編『韓愈資料彙編』（中華書局、1983 年）
- ・孫望・郁賢皓主編『唐代文選』（江蘇古籍出版社、1994 年）
- ・陳步編『陳石遺集』（福建人民出版社、2001 年）
- ・張廷銀・朱玉麒主編『繆荃孫全集・雜著』（鳳凰出版社、2014 年）
- ・劉小云『陳柱生平及其學術思想研究』（中國社會科學出版社、2015 年）
- ・斎藤茂「韓愈小伝」（川合康三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注 第二冊』研文出版、2017 年）
- ・郝潤華・杜學林校注『李翱文集校注』（中華書局、2021 年）